

# 豊臣大坂城下町の「筋」について―都市建設過程からみた一試論―

大澤 研一

**要旨** 大阪のまちでは中心部の東西方向の街路を「通」、南北方向の街路を「筋」と呼ぶのが「常識」となり、広く市民にも定着している。しかし、この呼び名を歴史的な目で検討した研究はほとんどみられない。そこで本稿では特に「筋」に注目し、「筋」は大阪における出現が遅くとも豊臣後期にはみられること、当初は都市開発の縁辺部において使用されていた可能性のあることを指摘した。そして、大阪に先行した主要都市との比較検討のなかで、「筋」出現の背景には豊臣期における計画的かつ「先進的」な都市建設があったことを推測し、豊臣期大坂の空間構造の歴史的重要性に言及した。

## はじめに ―二つの新聞記事から―

現在、大阪市では中心部の東西方向の街路を「通」、南北方向の街路を「筋」と呼び習わしている。呼び習わしている、という言い方なのは、この呼称は街路の公式名称ではなく、愛称だからである。大阪市役所ではこれらの呼称について「愛称は太閤時代からの習慣に従い南北方向の道路は「筋」、東西方向の道路は「通」を名称末尾につけ、「○○筋」「○○通」となっています」と説明している<sup>①</sup>。

では、どうして東西の街路を「通」、南北の道を「筋」と称し、使い分けるのか。またそれはいつからのことなのか。大阪に暮らす人にとってこ

れらの愛称は身近であるゆえ、繰り返し疑問が呈されてきたところである。そうした疑問は新聞でも恰好の記事素材として採りあげられてきた。たとえば、二〇一三年一〇月二十二日付『日本経済新聞』夕刊においては「京都、なぜ「通」あつて「筋」がない」、「平安京、縦横区別せず」、「大阪・神戸「通」に沿って街拡大、後から道つなぐ「筋」発展」という見出しで特集記事が生まれ、二〇一六年十二月十九日付『朝日新聞』朝刊でも「南北は「筋」・東西は「通」―「常識」探る」、「縦横無尽？道の名は」、「太閤時代の慣習」残る謎」の見出しを掲げた記事が載せられた。

こうした記事は「通」と「筋」に対する関心の高さを雄弁に物語っているが、これらのテーマはまさに、①なぜ大阪では「通」・「筋」を使い分け

るのか、②その歴史はいつからなのか、という二点に集約することができよう。そしてこれらの疑問に対しては、各紙において東西方向に延びる街路（「通」）沿いに町ができ、後にその町をつなぐ「筋」が誕生したとの見方や、豊臣期段階で「筋」の使用事例が確認される旨が紹介されてきたところである<sup>(2)</sup>。

これらの記事内容は興味深いものであるが、新聞記事の限界もあって具体的な論拠や歴史的な背景に触れるところはなく、現象説明にとどまってしまう。そのため、上記疑問に対する十分な解答とはなっていないといわざるをえないだろう。

そこで本稿ではまず「通」・「筋」の研究史を振り返り、そのうえで近年の都市史研究の成果に学びつつ、文献史学の立場から特に「筋」成立の背景とその意義を豊臣期大坂の都市建設過程と絡めて考える試論を提起してみたい。

なお「筋」を考えるにあたっては「通」との比較作業が必須であることはいうまでもない。後述のように「筋」は「通」とセットで存在するためであるが、さらにいえば「通」はそれを挟んで成立する「町」（両側町）の一部を構成しているので、本質的に「筋」と対比すべきは「町」（両側町）であることをまず確認しておきたい。また、今回検討する大坂城下町の範囲は、徳川期において「筋」・「通」が確認される上町（平野町はのぞく）と船場に限ることをあらかじめことわっておきたい。

## 一 「筋」の研究史

さて、「町」については都市共同体の観点から長い研究史が存在するの

に対し<sup>(3)</sup>、「筋」に関説した先行研究は極めて少ない。そのなかで、歴史地理学の立場から分析をおこなった足利健亮氏の論考は江戸時代の大坂の「筋」について正面から取り組んだほぼ唯一の成果であり<sup>(4)</sup>、もっとも参考とすべきものである。

足利氏の所説の要点と注目すべき指摘を抜き出してみると、おおよそ次のようになる。

①「筋」とは「延々と家々の横壁か横塀が続くところの、「通過」だけに有用な無表情な道」を指す。

②「大坂では南北路を筋、東西路を町または町通りと呼ぶ原則は少なくとも江戸時代の早い時期以来一貫している」。また宝暦六年（一七五六）『大坂町鑑』<sup>(5)</sup>によれば、「筋」は約七〇例が確認できる。

③大坂では東西路の「筋」も存在するが、それは「若干の例外」とみなされる。多くの東西路を「筋」と記す史料に明暦三年（一六五七）『新板大坂之図』があるが、これは京都の書肆による出版であることから信頼度は低い。

④東西路の「筋」は、南北路の「町通り」（「通」…大澤註。以下、同じ）とセットで用いられる。

⑤東西路の「筋」の一例として武家屋敷地区の「追手筋」（大手町）が挙げられる（図1）。この「追手筋」と同じ道筋にありながら谷町筋をはさんで西側に続く町人地では錦町・折屋町という個別町の呼称が使用されているが、「追手筋」一帯は武家地であり、武家屋敷の「土塀・石塀の間を通過する」景観が続く点で「筋」の景観と共通していることから「筋」が用いられている。

①は景観・機能に着目した「筋」の定義であり、街区に接する道筋のう



## 二 豊臣大坂城下町の形成過程と史料上の「筋」

大坂における「町」の出現時期を探ってみると、文献史料上は戦国期の  
大坂寺内町がもっとも早い。ここでは六つの親町と複数の枝町が確認され  
る。寺内町の敷地奥行は一〇〜一二間程度だったと考えられるが<sup>(8)</sup>、大  
坂寺内町での街区の具体的な形状や、「町」が両側町を形成していたかど  
うかは明らかでない。またこれら「町」の、次代の豊臣大坂城下町への継  
承関係もわかっていない。

一方、豊臣大坂城下町になると、「町」は上町の「赤坂町」(『言経卿記』  
天正十四年(一五八六)十一月十九日条)<sup>(9)</sup>、船場の「道修町」(『天正記』  
天正十六年(一五八八)七月二十日条)<sup>(10)</sup>のような事例が確認できる。  
このうち「赤坂町」は島町の古名である可能性があり<sup>(11)</sup>、次に述べるよ  
うに豊臣大坂城下町の建設当初からの町であったと考えられる。このよう  
に豊臣大坂城下町では建設当初より「町」は存在したが、文献史料からそ  
の構造までを明らかにすることはできない。

そこで「筋」の存在が顕著となる上町および船場の建設過程と「町」の  
構造を松尾信裕氏がまとめた考古学の成果によって確認し、「筋」出現の  
条件を考えてみたい。

まず上町である。上町では大川縁の土佐堀通りから島町までが、大坂城  
本丸普請と時期を同じくして天正十一年(一五八三)から建設に着手され  
た。そしてその南に続く釣鐘町から大手町(追手筋)までは天正十四年  
(一五八六)から始まる大坂城二ノ丸普請と連動して建設されたと推測さ  
れている。なお大手町より以南、本町までの範囲は豊臣期を通じて武家地  
だったと推定されており、この範囲が町場化するのは元和二年(一六一六)

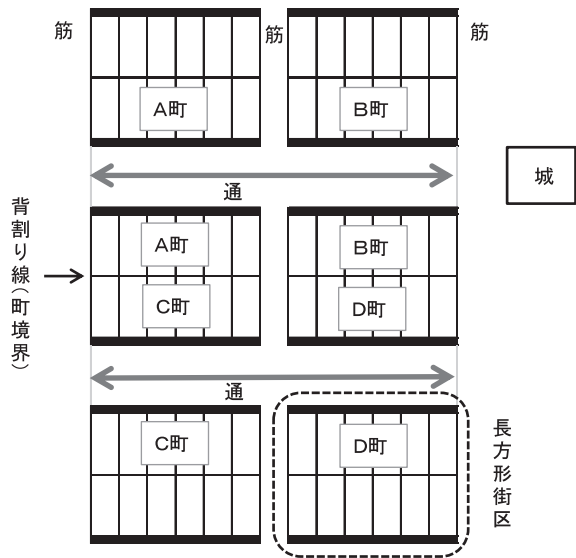


図2 上町の街区概念図

より本格的な開発がおこなわれたのであった。

ではこうして開発された町場の街区と「町」はどのようなものだったの  
だろうか。まず上町についてみると、街区は南北四〇間(奥行二〇間)  
×東西六〇間の長方形街区が基本単位であった。そしてそれらは大坂城の  
求心力を背景に、街区の長辺を東西方向に向けるタテ町型の配置がおこな  
われた(図2)。他方、船場では若干の調整区画を除き四〇間四方(奥  
行二〇間)の正方形街区が基本単位となった。また「町」の構造について  
は、上町・船場ともに街区内部の背割り線が東西方向で確認されることか  
ら、東西方向の街路を挟んで向き合う両側町として存在していたと理解で  
きる。

つまり、上町と船場では街区形状は長方形・正方形と違っていながら、  
ともに「町」は大坂城を向く東西方向を軸としたタテ町型であり、東西路、

以降のことと考えら  
れている。

一方、船場である  
が、こちらは大川縁  
の北浜から高麗橋通  
までが天正十一年  
(一五八三)より町  
場として整備が始め  
られた。そしてその  
南側に続く伏見町か  
ら南本町にかけては、  
慶長三年(一五九八)

すなわち「通」をはさんで両側町が形成される点で共通していた。よって町屋の間口は「通」に向かって南北から開いていたのである。

そうなる町屋の東側・西側においては隣接する街区の短辺（船場では東西と同寸法）同士が向かい合うことになり、こちらは町屋の間口が無く、壁が並ぶ景観が揃うことになった。これが「筋」となったのである。

大坂はこのように豊臣期において形状の違う街区を抱えながらも、それら街区の南北寸法は揃うという点で一定整理されたタテ町型の構造をもった城下町であった。これにより原則的に「町」は東西方向に出現し、逆に南北方向には「筋」が誕生する条件が整ったものとみられる。そして上町・船場の街区割は現在まで基本的に豊臣期のものが踏襲されていることから、「筋」景観についても豊臣期にさかのぼる可能性は高いといえよう。

では実際、「筋」は豊臣期の文献史料で確認できるのであるか。管見によれば、大坂での「筋」の初見は慶長五年（一六〇〇）、すなわち豊臣後期の「本町筋橋」である（『当代記』）<sup>(12)</sup>。これは惣構上（ここでは東横堀）に存在した大坂城内外を結ぶ虎口のひとつとして登場するのだが、この用例は本町を貫通する道路が「筋」呼称をもち、その延長線上に架けられた橋が「本町筋橋」と呼ばれていたことを意味している。「本町筋橋」は現在の本町橋にあたると思われるので、「本町筋」が現在の本町通りに該当する東西路であったことはまちがいない。

次に慶長二〇年（一六一五）の「大坂濫妨人并落人改帳」<sup>(13)</sup>には四つの「筋」例が登場する。本史料は大坂の陣直後に豊臣方の残党狩りをおこなった蜂須賀家によって作成されたもので、大坂の住人が自己申告した居住地をそのまま記していると推測される。よって豊臣最末期に大坂で認識されていた「筋」や「町」の呼称を知るうえで重要な史料といえるもので

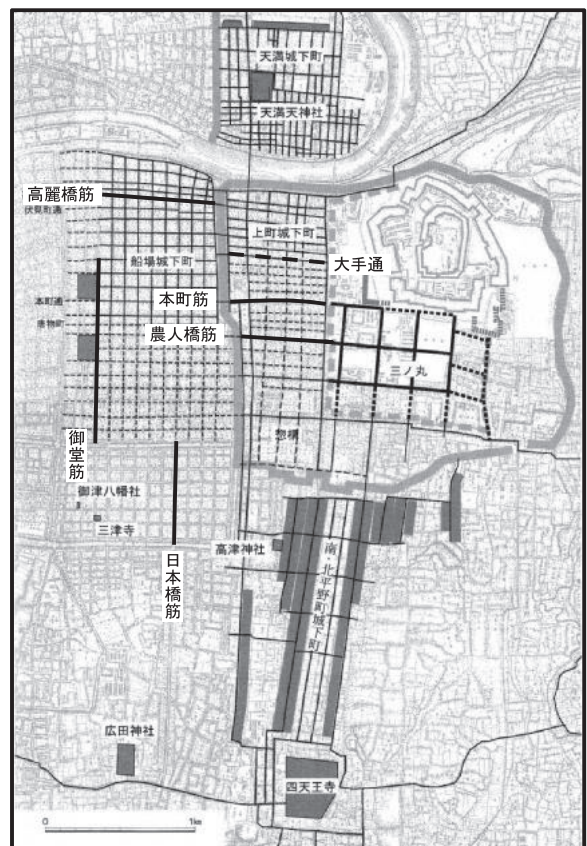


図3 豊臣大坂城下町復元図（註(6)松尾信裕2005に追筆）

ある。四例とは「大坂農人橋筋」・「大坂高麗橋筋」・「大坂御堂筋」・「大坂日本橋筋」である。徳川期城下町の空間構成を参考にすれば、前二者は東西路、後二者は南北路とみなせる。

現在のところ、豊臣期で確認できる「筋」は以上の五例に限られる。いずれも豊臣後期のものであり、豊臣前期の状況は明らかでない。しかしながら、これらの史料により遅くとも豊臣後期には「筋」が存在したことが、しかも東西・南北の両方位で存在したことをわねわね知ることができるのである。

そうなることを考える必要があるのは、現代の通説的理解とは違い、「筋」が東西方向にもみられるという現象である。ここで想起されるのは、前述した足利氏による「追手筋」の事例であろう。そこで以下では足利氏の指摘にヒントを得つつ、「筋」の所在地と城下町建設の諸段階の關係性に注

意を払いながら豊臣後期の各「筋」について考えてみることにしたい(図3)。

まずは「本町筋」である。「大坂濫妨人并落人改帳」でいう「本町筋」がどの範囲を指すのかは明らかでないが、古町名を伝えていとされる明暦三年(一六五七)『新板大坂之図』<sup>(14)</sup>では現在の本町通りのうち、上町部分を「内本町」、船場部分を「本町橋筋」と記している。ここでは便宜この両者を合わせて「本町筋」と考えておきたい。

ところで本町といえば、通常、城下町の町人地のなかでも成立が早く、かつ中心的な存在と認められる町である。しかしながら、大坂では上町地区の本町周辺は松尾氏によって豊臣時代は武家地だったと推定されている。「本町筋」は大坂城二ノ丸の南西角を起点に西へ延びているが、その最東端で「本町筋」に南面する現在の大阪歴史博物館敷地内では推定豊臣秀次屋敷が検出されており<sup>(15)</sup>、とりわけ谷町筋より東側においては武家屋敷地区のあいだの道だった可能性が高い。一方、船場地区においては、慶長三年(一五九八)の開発以降、「本町筋」周辺は一貫して町人地であった。つまり豊臣期の「本町筋」は大坂城に近い上町地区では武家地地区を、また船場地区では町人地地区を通る環境にあったと復元できそうである。そうなるの上町地区部分においては、足利氏が指摘した「追手筋」同様、「本町筋」では武家屋敷の塀が続く景観がみられた可能性があるのではなからうか。「筋」呼称の景観的背景が共通する点で注目してみたい。

次にやはり東西路である「大坂農人橋筋」と「大坂高麗橋筋」を検討する。まずは「高麗橋筋」である。「高麗橋筋」は高麗橋に続く「筋」という意味合いとなるが、ではこの呼称で呼ばれたのはどの範囲だったのだろうか。可能性としては高麗橋をはさんで東西に延びる道筋がその候補と

なるが、明暦三年(一六五七)『新板大坂之図』では東側、すなわち上町側を「島屋町」、西側の船場側を「高麗橋筋」と記している。「島屋町」は「島町」とも称したが、前述のとおりここは豊臣期に「赤坂町」と呼ばれたと推測されるので、「高麗橋筋」は高麗橋より西側、すなわち船場内での呼称だった可能性が高い。そこでこの「高麗橋筋」の状況を松尾氏による大坂城下町建設の諸段階を参考に確認してみると、船場建設の第一段階は大川縁から高麗橋通までが対象だったと推測されていることから、高麗橋通はその第一段階における船場の南縁辺部に位置したことになるのである。この点に注意しておきたい。

同様と考えられるのが「農人橋筋」である。まず「農人橋筋」の呼称の範囲を確認しておく、明暦三年(一六五七)『新板大坂之図』では上町の谷町筋と東横堀に架かる農人橋との間の町名として確認され、船場には及んでいない。そのため、「農人橋筋」は豊臣期においても上町における呼称だった可能性が高い。

そのうえで豊臣期の当地の状況を考えてみると、「農人橋筋」は「本町筋」の南側に平行して位置している。当時の「農人橋筋」の状況を直接告げる材料は得られていないが、すでに述べたように上町での「本町筋」周辺は武家地と推定されており、かつ「農人橋筋」の南側に位置する和泉町では豊臣前期の瓦工房が確認されている<sup>(16)</sup>。周囲がこうした環境であれば、「農人橋筋」が豊臣前期から町人地として開発されていたとは考えにくく、むしろ西側に続く船場の開発状況を参考にすると、早くとも「大坂町中屋敷替」が実施された慶長三年(一五九八)以降の開発であったと考えられよう。そしてこのことは「農人橋筋」付近は当初都市縁辺部であったものが、のちに市中に組み込まれていったことを推測させるのである。

「高麗橋筋」・「農人橋筋」が都市縁辺部から内部へ組み込まれたという動きは、南北路の「御堂筋」にも共通する。「御堂筋」は船場であって、慶長三年（一五九八）に創建された北御堂（浄土真宗本願寺派津村別院）と南御堂（真宗大谷派難波別院）の東側に接する道である。しかもこの道筋は、同年に船場の第二期開発が開始された際の船場の西端ラインにあたる「惣尻切丁」のさらに一本西側に位置したのであり、その意味で船場の西縁辺部を構成した道だったとみなせよう。

ただし、こうした縁辺部の「筋」もその後都市内に組み込まれて「町」化を遂げていった。たとえば「御堂筋」は南北路であったが、徳川期になるとそれをささむ両側町の形で「雛屋町」・「北久宝寺五丁目」という南北方向の「町」が出現した（大阪歴史博物館蔵『明暦元年大坂三郷町絵図』<sup>17</sup>）。しかし、その場合でも街路呼称としての「筋」は継承され、現在にいたっているのである。

以上、「高麗橋筋」・「農人橋筋」・「御堂筋」の三つの「筋」について検討してみたが、限られた史料ではあるものの、これらに共通する特徴のひとつとして、方位を問わず都市空間の縁辺部に位置した道という点を挙げることができるのではなからうか。

ただし、これらがなぜ「筋」と呼ばれたのかという点について明快な回答を提示することは容易でない。しかしながら、「筋」が都市縁辺部で使用されることがあったとみれば（特に東西方向に）、それは建設当初は両側町でなく、都市空間側にだけ町屋が並ぶ片町を形成していた可能性があらう。その場合、その景観を足利氏の指摘①を参考に考えれば、「町」景観とみなすには不十分（未完成）な姿だったという想定が可能かもしれない。多分に憶測を交えることとなるが、一案として提起しておきたい。い

ずれにしても豊臣期には徳川期以降の「筋」の「常識」には合致しない事例がみられる点は確認しておく必要がある。

以上、後半では憶測も交えるかたちとなったが、豊臣期大坂における「筋」の実態についてみてきた。その結果、いわゆる「筋」景観が南北路に沿って生まれる素地が大坂の街路構造には内包されていたことが明らかになった。また文献史料から豊臣後期には東西路を含む複数の「筋」が確認されることもわかった。大坂の「筋」は遅くとも豊臣後期には確実に存在していたのである。

一方、豊臣期の「筋」には多様性のあることも判明した。そのひとつが「筋」の方位であり、南北路に限らず東西路の「筋」も一定存在することがわかった。そしてこの東西路の「筋」は、武家地や都市建設の過程において一時的に都市縁辺部に置かれた場所で使用された可能性も考えられよう。そして、こうした場所での街路が「筋」と呼ばれた理由については、これらの景観が「町」より「筋」に近かったという理解を提起しておきたい。

なお、足利氏は徳川期の事例を検討するなかで、東西路の「筋」は例外的存在と判断したが（前掲③）、こうした豊臣期の事例をみるとそれらのなかには豊臣期の「筋」を継承したものもあるのではなからうか。「筋」の成立・変容過程を一層追究する必要がある。

### 三 大坂に先行する都市の空間構造と「筋」

大坂城下町の街区は長方形街区および正方形街区を単位としながらも、いずれも南北方向の寸法は四〇間で統一されるといふ明快な空間構造を

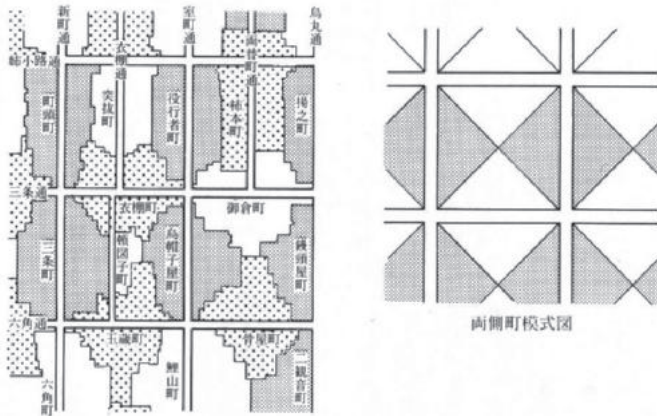


図4 京都下京の町割形態と両側町模式図(玉井1992)

現させていた。それを基盤として東西方向に「町」をもつタテ町型の城下町をつくりあげていたことが、同時に南北路の「筋」を出現させることになったのであった。

ところで、典型的な「筋」は都市を構成した街区が東西南北のうち二面のみを使用して「町」が形成された場合に成立したといえるわけだが、では豊臣期大坂城下町以前の都市において「筋」はどのように存在したのがあるのか。すなわち、大坂の「筋」はどのような都市系譜のなかに位置づけられるのであろうか。豊臣期大坂城下町に先行する主要な都市における空間構造の状況を確認してみたい。

●京都【図4】

中世最大の都市は京都であった。京都は平安京の条坊に淵源をもつ四〇丈(約六〇間)四方の正方形街区を町とする基本構造をもっていた。そして当初は南北路に面して間口が開く四行八門制を採っていたが、平安中期には東西路に面する宅地が現れ、さらに室町期には街区の四面に家並が形成されるのが一般的となった。そして戦国期には街路をはさんで向かい合う両側の家々が地縁的な町、すなわち両側町を形成していったので

あった。

すなわち戦国期の京都においては正方形街区を基本とし、街区の四面において街路をはさんで隣接する街区との間に両側町が成立していたのであった。したがって街区の四方に「町」が存在したのであり、「筋」の景観が成立する条件にはなかったといえよう<sup>(18)</sup>。

なおここで天正末年頃、豊臣秀吉により京都で施行された天正地割について述べておきたい。京都の街区は約六〇間四方という奥行の深いものであったため街区中央部まで土地利用が及ばず、未利用地が残される状況が生まれていた。それを克服するため街区の中央部に南北の道(突抜)を通し、短冊型地割を整備したのが天正地割である。この現象は、街区内有効利用するためには適切な街区の形状と奥行の長さというものが一定ありうることを物語っているのではなからうか。この件については他都市でも注目してみたい。

●尾張小牧(織田信長)【図5】

尾張国の小牧城下町は永祿六年(一五六三)、織田信長により建設が開始された。前川要氏はこの小牧を長方形街区と短冊型地割を組み合わせた、近世城下町のもっとも初源的な存在と述べている<sup>(19)</sup>。以下、中嶋隆氏、小野友記子氏の研究により、その空間構造を考えてみたい<sup>(20)</sup>。

小牧山城の南に続く洪積台地上に立地した城下町は南北一・三キロメートル、東西一キロメートルの規模を測る。城下町に先行する中世村落は確認されておらず、この城下町はまったく新規に建設されたものと考えられている。ここに長方形街区と短冊型地割の組み合わせが導入されたということになる。

そこで空間構造の詳細をみてゆくと、城下町内の道は城方向を向いた南

ある点と対応した現象といえよう。これらから小牧における長方形街区はその出現の意義は認められる一方で、街区の計画的な設計・配置には至っていないかったと考えるべきだろう。

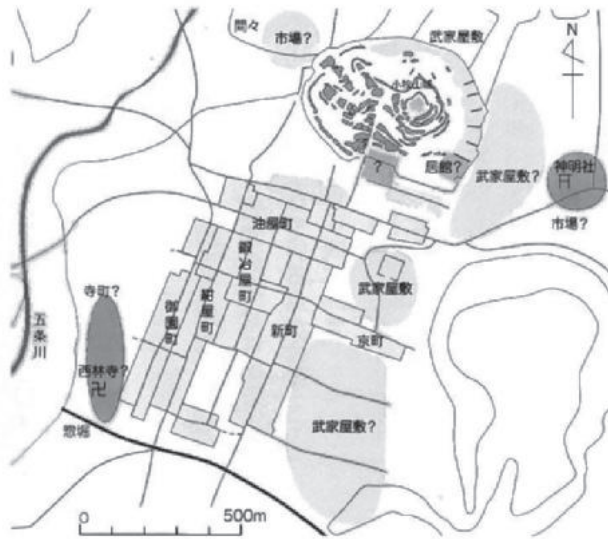


図5 小牧城下町復元想定図 (鈴木2012)

一三〇メートル前後と比較的揃っているが、全体としてはその寸法にかなりの幅がある点は見逃せない。また長方形街区をはさむ南北路についてもところどころクランク状のくい違いを見せており(特に東西方向で)、完全な基盤目状の街路を構成していない。街区の大きさに幅が

北路が四本と東西路が五本ほど復元される。城に近いところには東西方向に並行する二本のヨコ町(ひとつは油屋町)が存在するが、メインとなる街区はその南側に展開する長辺を南北方向に向けた長方形街区で、東から新町・鍛冶屋町・紺屋町・御園町(以上タテ町)に比定される。この長方形街区は、そのサイズについてはヨコ町・タテ町を問わず長辺が約一九〇〜二八〇メートル(九〇間余〜一四〇間)、短辺が約九〇〜一三〇メートル(四十五間〜六〇間余)となっている。短辺については一三〇メートル前後

この小牧における「町」と地割方向をみてゆきたい。タテ町部分では、推定鍛冶屋町からは南北路をはさんで埧塙や鉄滓などの鍛冶関連遺物が出土しており、街区の長辺に沿って短冊型地割が並ぶ両側町の成立をうかがわせている。では、短辺側に地割はどうだったのか。四つのタテ町に交わる京町の街路がある。この街路が鍛冶屋町に接した部分で確認してみると、ここではこの街路に面して間口が開く構造が復元されているのである。地籍図が当時の地割を反映しているとすれば、必ずしも南北路に沿って間口が開くだけではなかったことになる。

この現象と密接にかかわっているのが長方形街区の寸法ではないかと思われる。小牧の長方形街区は京都以上に大型であり、そのため街路から背割下水までの奥行は約九〇〜一三〇メートル(四十五〜六〇間余)に達している。実際その深さゆえ敷地奥は庭や畑への利用が推定されているところである<sup>2)</sup>。こうした状況を考えると、長方形街区でありながら京都のような四面に間口が開く街区構造が一定想定されるかもしれない。

小牧の状況は以上であるが、基本となる長方形街区を配置しながらも街路にくい違いがみえる点や、一部であれ二面を超える街区側面に間口が開いている点には注目しなければならぬ。小牧は長方形街区と短冊型地割の導入で注目されているところであるが、街区のサイズやその配置プランという点では過渡期の都市とみるべきではなからうか。

●美濃井口・岐阜【図6】

永禄一〇年(一五六七)、織田信長は小牧から井口へ本拠を移転させ、そこを岐阜と改めた。近年、精緻な研究を発表している山村亜希の研究に基づき当地の概要をまとめておく<sup>22)</sup>。

井口・岐阜城下町は長良川の左岸に形成された扇状地の扇頂部から扇央

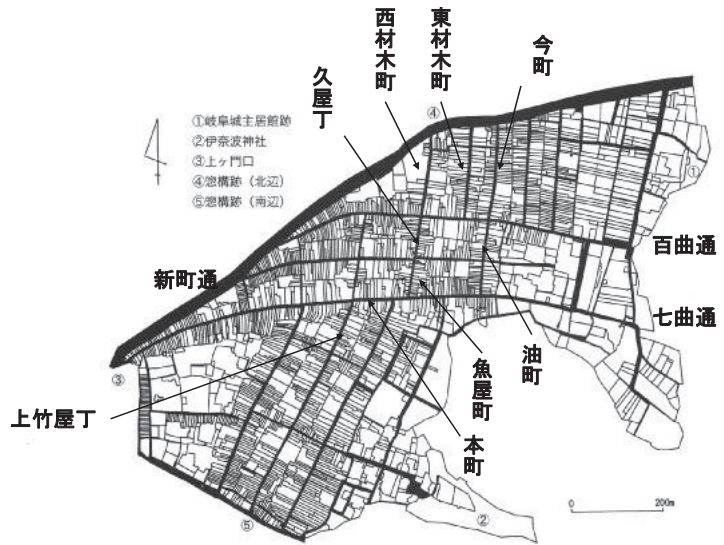


図6 明治21年岐阜城下町地籍図(井川祥子氏作図:内堀註(23)2008)に加筆

部にかけて立地する。扇頂部に近い金華山には岐阜城(稲葉山城)が、そしてその山麓には武家屋敷があり、その西側に城下町という配置である。

当地における町場は久屋丁↪魚屋町↪本町↪上竹屋丁の街村状集落をベースとした。その後、斎藤道三期になると東西方向の七曲道・百曲

一七〇メートル、短辺が六〇・八〇・一〇〇メートルの三種類となっている。おおむね長辺は六〇間余↪九〇間余、短辺は三〇↪五〇間と小牧よりはコンパクトになっているが、バラつきがみられることから整理された寸法で設定された街区とは言い難いように思われる。

そのうえで各街区における地割の方向であるが、西材木町・今町の道筋では間口が基本的に道に向いて開く形が優位となっている。ただし七曲道・百曲通に面した街路の中央部では七曲通・百曲通に向けて間口が開く地割が多くなっており、全体的にみれば今町をのぞけばどの街区も三面ないし四面に間口が開く構造となっている。したがって、間口の開かない「筋」景観が連続的に展開する箇所はごく狭い範囲に限られてしまうので、「筋」は岐阜では顕著な存在でなかったものと推測される。ただし、推定武家地内の地割をみると「筋」景観にふさわしい街路が数本確認できる。しかしその地割年代をどうみるかは微妙なので、ここでは判断を保留したいが、足利氏の指摘⑤にかかわって興味深い存在であることは指摘しておきたい。

●近江長浜【図7】

天正二年(一五七四)、羽柴(豊臣)秀吉は近江今浜に新たに城を築き始めた。のちの長浜城である。当地には先行する都市的空間は存在せず、城とあわせて城下町も新規に建設が開始されたのであった。この城下町は安土城下町に先行しながら整った碁盤目状の街区構造をもつ点が注目され、近世城下町としての先進性が大きく評価されているところである<sup>(24)</sup>。

長浜城下町は城を琵琶湖畔に置き、その東側に展開した。最初は東西南方の街路とそれを挟む「町」が建設された。東・西本町、大手町、東・中・西魚町、東・中・西北町がそれである。町屋の間口がこれら東西南方の街路に開いたことから長浜はタテ町型の町としてスタートしたのであった。

道が整備され、その間を結ぶ油屋町が成立したが、織田信長期になると長方形街区と諸町の出現がみられるようになる。ひとつは七曲道・百曲道の間に設置された新町通にともなうややいびつな長方形街区と上新町・中新町・大工町である。もうひとつは南北方向の東・西材木町と今町の長方形街区であり、特に材木町は信長が政策的に建設した町と評価されている<sup>(23)</sup>。そこで各街区の状況を明治二十一年作成の地籍図によりみてゆくと、惣構内では長方形街区と短冊型地割の存在が確認されるが、長方形街区の寸法については、新町をささむ南北の街区では長辺が一三〇↪一六〇メートル、短辺が一〇〇メートルを測り、今町・材木町の街区では長辺が

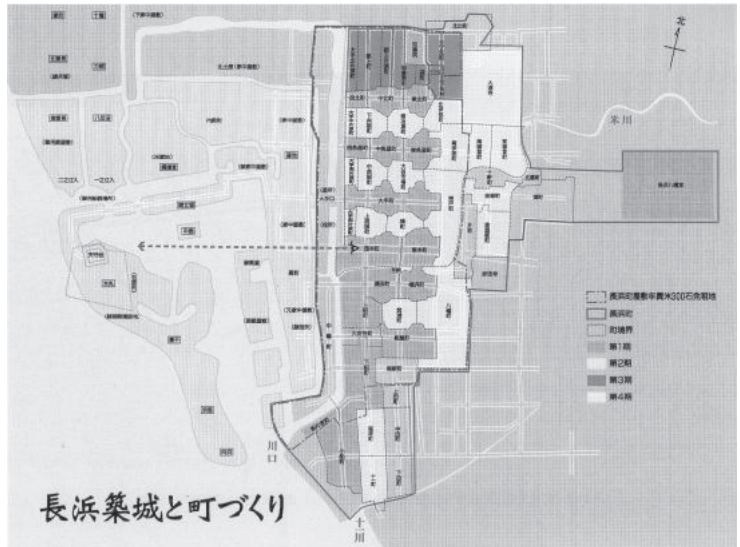


図7 長浜城下町空間構成図 (市立長浜城歴史博物館2002)

その後、北国街道に沿う南北方向の街路と「町」が整備された。横町や大谷市場町、上・中・下呉服町などのヨコ町である。ただし、これら南北方向の「町」は街区の角地では先行する東西路に対し間口が開いていたため、それに喰い込むことはできなかった。このように長浜はタテ町にヨコ町が加

わる形で、六〇間四方の正方形街区を単位とする城下町が整備された。本来タテ町型なので、街区の角地の地割は東西路を向いていたが、それ以外のヨコ町部分では地割は南北路を向いていたのである。すなわち、角地の限られた部分をのぞけばどの正方形街区も基本的に四面に対して間口を開く構造になっていたのである。よって長浜では「筋」の景観は生まれえなかったといえよう。

●安土【図8】

織田信長は天正四年(一五七六)、安土において城郭とあわせて城下町の建設に着手したとみられる。安土における町場建設時の主たる軸線は四



図8 安土城下町の町割りと地名 (滋賀県安土城郭調査研究所2004) に加筆

南へ延びる道(27)を軸線とし、その両側に並行する二条の道路と合わせた三条の道路のあいだに展開する長方形街区の二条(南は惣構土手まで)が城下町の中心部であった(28)。

これらの長方形街区は短辺が約八〇メートル(四〇間)であるのに対し、長辺は約一〇〇メートル(五〇間)から一六〇メートル(八〇間)までとかなりの幅がある。また街区の形も不等辺四角形を呈しており、必ずしもきっちりと形を整えた街区になっていないわけでもない。地形や先行する諸条件と折り合いをつける形での設定だったと考えられよう。

そのうえで、長方形街区における間口の開き方をみると、坂田孝彦氏がその論考でとりあげた第8地点での復元が興味深い。ここは南北方向に長い長方形街区の北端部分にあたり、発掘調査成果をもとに街区の北側・東側・西側に接する道に面した地割が復元されている。結論を述べると、

つ(25)な  
いし五つ  
が復  
元されて  
いる。こ  
のうち下  
豊浦地区  
の活津彦  
根神社を  
起点とし  
て舌状微  
高地上を

坂田氏はそのいずれの道に向かっても間口が開く地割が想定されるという。なお、街区の中央部にも道に面しない地割があり、北側の道からの出入りと推定される通路状遺構が確認されている。

この復元は長方形街区の四面すべてを対象としたものではないが、三面の状況から推せば四面に間口が開く構造になっていた可能性は排除できないであろう。もちろんこれは限られたデータによる推測であるが、こうした構造が安土において一般化されるとすれば、安土では「筋」は存在しなかった功算が高くなるものと考えておきたい。

以上、豊臣大坂城下町に先行した主要な都市の街区構造についてみてきた。その結果、正方形街区や長方形街区は大坂に先行する都市で複数例確認されたが、大坂のように「町」が街区の二面のみ存在し、残る二面に「筋」の景観が規則的に展開する街区構成と寸法を確実に整えた都市は見出すのが難しいことがわかった。したがって、「町」とセットで出現する「筋」を生む空間構造をもった都市としては豊臣大坂城下町がもっとも早い部類に属すといえそうである。

ではなぜ豊臣期大坂で「筋」が生まれることになったのであろうか。私見では、この件は近世城下町の空間成立史とそのなかにおける豊臣大坂城下町の位置づけにかかわる問題ではないかと考えているので、現段階での見通しを述べておきたい。

「筋」が生まれるということは街区の四面に「町」が形成される京都タイプの街区が採用されなかったことを意味する。私見ではこれを街区の形状、すなわち長方形街区・正方形街区を問わず、街区の大きさに理由があったためと推測している。京都では一辺六〇間（二分割すると奥行三〇間）

の街区の中央部分に空閑地が生じたため、のちに秀吉によって突抜が通され、土地の有効活用を図る動きがみられたことは先に紹介した。大坂に先行する主要都市では街区の奥行が深いのが通例であったわけだが、新規建設の豊臣大坂城下町はそうした空閑地が生じる可能性の高い寸法の街区を避けようとしたのではなからうか。豊臣大坂城下町の中心地となった上町と船場では先行する中世都市・村落はほとんど見受けられず、広範に新規の街区建設をおこなう条件に恵まれていたといえよう。そこに土地の有効活用を念頭に置いた奥行二〇間という街区を当時一般的だったタテ町型に配列した結果、東西方向に「町」、そして南北方向には間口の開かない「筋」景観が現出することになったものと考えられるのである。都市空間の有効活用を図る目的で設定された街区寸法が「筋」を生み出す条件となったという理解である。

長方形街区と短冊型地割のセットの存在が近世城下町のメルクマールとして注目されてから久しいが、実際には長方形街区にしても形の整った「純粹な」街区となるまでには時間を要したのであり、街区寸法も都市の諸条件に対応しながら合理的なものが採用されてゆく方向にあったのではなからうか。

その点で豊臣期大坂は「先進的」な街区を導入し、それを整然と配置するプランが実現できたとみるべきではなからうか。そしてその結果として「筋」が誕生することになったと理解されるのである。

## おわりに

以上、足利氏の成果を援用し、また他都市との比較もおこないながら街

区構造の観点から大坂の「筋」について考えてきた。

「筋」の文献史料上の初見については現在のところ豊臣後期にさかのぼることを確認した。それらの史料による限り、「筋」は武家地周り、および城下町の建設によって一時的にでも縁辺部に置かれた地点に使用されたといえる。その特徴を考えると、建造物の間口が連続して開く景観に達していないところが「筋」と称されたと考えることができるのではなからうか。そして「筋」の方位は東西・南北方向ともにみられたのであり、東西方向の「筋」を例外とする足利氏の見解を豊臣期にも適用できるかどうかは微妙であろう。街区構造上、南北路の「筋」が多かったことはまちがいなからうが、「筋」の景観をもった東西路は一定存在した可能性は排除できないだろう。徳川期に確認される東西方向の「筋」の存在はこの豊臣期の状況を念頭に考える必要がある。

そして重要なのは、「筋」景観を生み出す条件が大坂でいち早く整ったとみられる点である。豊臣大坂城下町では建設当初より奥行二〇間であつ形を整えた長方形街区・正方形街区が整然と配置され、「町」が一方向に揃うタテ町型の城下町が実現されたのであつた。吉田伸之氏は近世大坂城下町を「創設型」<sup>(29)</sup>と呼んだが、空間面で規制力をもつ中世都市はほとんど存在しなかつたという条件と、信長・秀吉による城下町建設の足跡・経験があいまってこうした豊臣大坂城下町が実現したのではなからうか。

このように「筋」は豊臣大坂城下町の構造のみならず、近世城下町の成立過程と課題を考えさせる存在であることが判明した。しかし、いくつかの課題が残つた。「筋」の語源がひとつである。「筋」は細く、まっすぐ伸びるものを指して使用するのが一般的であるが、都市に適用された背景についてはよくわからない。また「筋」は大坂以外の近世都市にも存在した。

会津若松・伏見・名古屋・鳥取などがその代表例である。ただしその使用開始時期は明らかにされておらず、空間構造の比較検討もおこなわれていない。大坂との比較や広く近世都市の街区・空間構造との対比作業をするなかでさらに「筋」の意義を深めてゆく必要がある。

#### 【註】

- (1) 大阪市役所ホームページ内「大阪市の道路の現況」。
- (2) 上記『朝日新聞』の記事にかかわって筆者は取材を受け、史料上、豊臣時代の大阪において東西方向の「筋」が確認できる旨を回答し、その旨が掲載された。詳細は後述。
- (3) 佐藤信・吉田伸之編『新体系日本史6 都市社会史』（山川出版社、二〇〇一年）所収論文を参考のこと。
- (4) 足利健亮「大阪の「筋」とその意味」（同『中近世都市の歴史地理』地人書房、一九八四年）。
- (5) 『大坂町鑑集成』清文堂出版、一九七六年。
- (6) 松尾信裕「豊臣期大坂城下町の成立と展開」『ヒストリア』一九三号、二〇〇五年。同「豊臣大坂城下町の建設と拡大過程」（大阪歴史博物館・大阪文化財研究所編『大坂 豊臣と徳川の時代』高志書院、二〇一五年）。以下、松尾氏の見解はこれらの論文に拠る。
- (7) 野高宏之氏は「筋」の発生について、町名が増加すると「すべての町名とその位置を記憶しておかない限り、店舗などの目的地に到達できない事態が起きてきた。そこで目的地への道筋を示すために街路名をつける必要が生じた」とした。そして、東西街路は町名をもっているもので、「真に名称を必要としたのは横町の連続する南北の街路」であつたと「筋」名出現の理由を説明した（町・通り・筋）『大阪の歴史』三一号、一九九〇年。この説明は「筋」名に橋名などが付された場合には有効かもしれないが、「筋」がもつ本来の

歴史的な意義には迫れていないと考える。

- (8) 玉井哲雄「都市の計画と建設」『岩波講座日本通史 第11巻 近世1』岩波書店、一九九三年。大坂寺内における敷地奥行は新屋敷に限られるが、一〇間という史料が確認される(『天文日記』天文六年九月十二日条『大系真宗史料 文書記録編8 天文日記I』法蔵館)。天満寺内でも「奥十間」の家屋敷が知られる(『言経卿記』天正一六年二月二十二日条『大日本古記録 言経卿記二』岩波書店、一九六〇年)。
- (9) 註(8)『大日本古記録 言経卿記二』。
- (10) 『戦国史料叢書毛利史料集』人物往来社、一九六六年。
- (11) 『石山旧録』東京都立中央図書館蔵。
- (12) 『当代記・駿府記』続群書類従完成会、一九九五年。
- (13) 『新修大阪市史 史料編 第5巻 大坂城編』大阪市、二〇〇六年。
- (14) 矢内昭「大坂三郷の形成過程」『大阪の歴史』第九号、一九八三年。なお、明暦三年「新板大坂之図」は『古板大坂地図集成』(清文堂出版、一九七〇年)に復刻版が収められている。
- (15) 中村博司「大坂城と城下町の終焉」(佐久間貴士編『よみがえる中世2 本願寺から天下統一へ 大坂』平凡社、一九八九年)。
- (16) 黒田慶一「大坂の瓦生産」(註(11)『大坂 豊臣と徳川の時代』)。
- (17) 『大阪歴史博物館所蔵 明暦元年大坂三郷町絵図』大阪市立大学大学院文学研究科都市文化研究センター、二〇〇八年。
- (18) 高橋康夫・吉田伸之・宮本雅明・伊藤毅編『図集日本都市史』東京大学出版会、一九九三年。最近の成果としては、河内将芳『戦国京都の大路小路』(戎光祥出版、二〇一七年)がある。
- (19) 前川要『都市考古学の研究—中世から近世への展開』柏書房、一九九二年。
- (20) 中嶋隆「小牧城下町」(仁木宏・松尾信裕編『信長の城下町』高志書院、二〇〇八年)。小野友記子「小牧山城と小牧城下町」(新・清洲会議実行委員会『守護所シンポジウム2@清洲 新・清洲会議資料集』二〇一四年)。
- (21) 註(20) 中嶋論文。
- (22) 山村亜希「戦国城下町岐阜の景観形成と長良川」『長良川中流域における岐阜の文化的景観保存調査報告書』岐阜市教育委員会、二〇一五年。
- (23) 内堀信雄「井口・岐阜城下町」(註(20)『信長の城下町』)所収「明治二十一年岐阜城下町地籍図」(井川祥子作図)。
- (24) 太田浩司「長浜城下町」(註(20)『信長の城下町』)。
- (25) 坂田孝彦「考古学からみた安土城下町の構造」(註(20)『信長の城下町』)以下、坂田氏の見解は本論文に拠る。
- (26) 木戸雅寿「安土山と安土山下町—織田信長が目指した形—」(註(20)『信長の城下町』)。
- (27) 松下浩氏はこの道を中世以来の道と考えている(「安土城下町の成立と構造」註(20)『信長の城下町』)。
- (28) 註(25) 坂田論文。
- (29) 吉田伸之「町人と町」(同『近世都市社会の身分構造』東京大学出版会、一九九八年。初出は一九八五年)。

【挿図出典】

- 滋賀県安土城郭調査研究所 二〇〇四『図説安土城を掘る』
- 市立長浜城歴史博物館 二〇〇二『秀吉の城と城下町 近世城下町のルーツ・長浜』
- 鈴木正貴 二〇二二『戦国のあいち』愛知県埋蔵文化財センター
- 玉井哲雄 一九九二「近世都市空間の特質」(吉田伸之編『日本の近世9 都市の時代』中央公論社)
- (付記)
- 本稿は、平成二十九年七月二十八日開催の「平成二十九年(二〇一七)なにわ歴史講座 第2期「都市おさかの歴史と考古学」第三回「町・筋・丁目 —豊臣・徳川期の都市と大坂城下町の空間構造から—」での報告内容をもとに原稿化した。

## 도요토미 오사카 조우카마치의 「쓰지」에 대해서 - 도시건설과정에서 본 일시론 -

오사와 겐이치

오사카에서는 동네 중심부에 있는 동서 방향 길을 「도오리」(通)、남북 방향 길을 「쓰지」(筋) 라고 부르는 것이 일반적이고 넓게 시민들에게 정착하고 있다. 그러나 이 명칭을 역사적으로 검토한 연구는 거의 볼수 없다.

그래서 본고에서는 특히 「쓰지」에 주목하여 「쓰지」가 오사카에서 늦어도 도요토미 (豊臣) 후기에 출현한 것과 당초는 도시 개발의 끝 부분에 있어 사용 되고 있던 가능성을 지적했다.

그리고 오사카에 선행한 주요 도시과의 비교 검토 속에서 「쓰지」가 출현한 배경에는 도요토미 시대에 있어서의 계획적 및 선진적인 도시 건설이 있다는 것을 추측하여 도요토미 시대 오사카 공간의 역사적인 중요성을 밝혔다.

